
牧場貴族と死神王女

ヤマタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

牧場貴族と死神王女

【Nコード】

N7248X

【作者名】

ヤマタカ

【あらすじ】

牧場貴族と世間から馬鹿にされる『ダグラス家』から今日、一人の男が王都・アシランの学校に入学した。名をリクト。ミルク搾りと絵画が趣味なだけの平凡男子であるが、真面目な護衛女騎士リリイと供に面倒ながらも学校生活を送っていくことに。しかし、ある日廊下でアシラン王国の王女、セラ姫と出会う。そして彼女はこう言った。「あら、貴方、今日死ぬわ——」。

そんな、嬉しくない死刑宣告を受けた主人公と、死神もどきな王女の奇妙な恋愛劇。

門前

王都『アシュラン』。

この世界には二つの大陸があり、その片方を治める国の名でもある。大陸の名はユーデリカ。

もう一つの大陸の名や、その大陸を治める国のことは今は省略しておきたい。

アシュランには一つの学校がある。

王都で運営される学校ということもあり、王族と貴族しか入ることが許さない由緒正しき名誉ある学園だ。ただ、一応一般階級の者たちが入れる試験も存在する。けれど、それはごく少数だ。

学校にはアシュランが治めるユーデリカ大陸から様々な貴族の令嬢、ご子息がこぞって入学してくる。

一応試験はあるがそれは貴族ではない一般階級の者が入るためのもので、貴族出身の方々には今ではほとんど意味がないものだ。

「なんだかなあ」

そう言って、溜息をつく。

由緒正しきだの、名誉だの。そんなものに目を輝かせて何が面白いのだろうか。

僕みたいな凡人貴族が理解する方が難しいのかもしれないが。

「リクト様。アシュラン学園の門前でその様な溜息をされては『ダグラス家』の名誉に傷がつきます」

「傷つくって、牧場貴族のどこに？」

「色々なところにです」

姿勢正しく、胸を張り騎士たる威風を漂わせる彼女、リリィ・ダグラスは僕の後ろで静かに言う。

僕こと、リクト・ユン・ダグラスの直属護衛兼、女騎士である。名字が同じなのは彼女が僕と血が繋がっているのではなく養子だからだ。まあ、そのことについては追々語っていくとして。

幼少の頃よりずっと一緒にいて、これからも逝く末まで同じ道を歩み続けると誓ってくれた彼女。正直、僕みたいな阿呆よりもっと良い将来がありそうだけれど。変わった性格をしている。

「……ま、うな垂れても仕方ないよね」

「そうです。わかったらその足をさっさと動かしてください」

「ホント、キミはひどいね」

「貴方にだけです」

そんな、僕たちにとっては何十回、何百回とやってきたいつもの問答を済ませて。

僕らは門をくぐる。

眼前にあるはアシュラン王国にある学園。

入学するは、僕ことリクトと護衛女騎士リリィ。

約百年前、爺ちゃんが国を守るぐらいの大きな手柄を立てたことで僕の家は貴族になった。

けれど、もともと牧場しかしていなかった僕らの家はただ貴族になっただけで大して変わることもなく。平和にミルク牧場を営んでいた。

ゆえに、世間からは僕らのことを皮肉も込めて『牧場貴族』なんて呼ばれている。

ま、いいけどね。

世間なんて気にしない。僕はこの牧場で毎日せつせとミルク搾り

に励みながら趣味の絵画を楽しめればそれでいいのさ。

……なんて思ってたのにさ。まったく、さつさと貴族なんて名だけのもの、捨てればよかったのに。

一年前、入学証明書なんて誰も受けてないのに何で来るんだよと突っ込みはどこ知れず。

数ヶ月前、僕の入学証明書を見た瞬間猛勉強を開始したリリイが驚きの入学試験合格を果たし。

そして、今ここに。二人で、この門をくぐる。

「よろしく、リリイ」

「もちろんです、リクト様」

ま、なるようになるかな。

リリイ

入学の式典はそれはもう豪華だった。

『アシュラン建国六百年記念』だか知らないが相当な演出、絢爛な舞台だった。ただの入学生にも関わらずまるで英雄扱い。王都全域を一つのステージにして盛大なセレモニーと化していた。

いやはや、こんな金あるなら貧しい民に1ガルドでも資金回せよと突っ込みたいね。

そんな勇気もないのだが。まあしかし、僕が最も驚いたのはやはり式典最後の催しだろう。

「おい、あれが……！」

「ああ、次期アシュランの王になれる方だな」

「なんとという美しさだ……」

式典の最後は現、アシュラン王自らが入学生に対して祝辞を述べてくれるという、ありがた〜いものだった、らしい。僕にしてみれば、どう見ても王冠乗つけたおっさんが王国のため、全身全霊でうんたらかんたら言うだけの面倒な催しだった。

特筆すべきは、次だ。

アシュラン王の祝辞が終わると、それに呼応するようにどこからともなく「アシュラン王女、セラ姫様より答辞の儀！」と盛大な大声が号されると同時、これまた耳を塞ぎたくなるような演奏が大々的に広場に響き渡った。正直、ものすごく迷惑だった。

が、他の貴族の令嬢・子息が耳を塞いでいる最中一人だけ、たった一人だけ悠々と歩く女の子が一人。

アシュラン王と同じ金髪。長さは……おいおい、従者が後ろで担ぎ込むように持ってるぞ。四人がかりで。どんだけ長いんだよ。

顔は装飾でほとんど見えないが、かろうじて光の薄いところから見えた。

……綺麗だった。

横にいた貴族ぼつちゃんがメロメロになるのも頷ける。ありや凄

い。
あの女が次期王ならまだまだこの国は安泰だな。何でも過去二百年以上保った国はないと聞くし、そう考えれば六百年も繁栄し続けてきたこの国は大成成功といえるだろう。

何はともあれ、平和なことは良いことだ。

「ふう」

さて、そんなこんなで入学の式典セレモニーから早二日。

学校が始まって授業も開始だ。現在僕は教室にいる。

教室といってもやや横長の机があつて、左右の端に生徒が座る。

机は一つの列に二つ配置され、平行して並んでいく。簡単にいうと一列に四人座つて、それが10列ぐらいある感じだ。

しかも階段式で席が後ろに下がるたび一段ずつ上がっていくものだ。

ゆえに一番前で教卓に上がる先生は皆から見下ろされる形となる。なんとも偉そうな者が考えそうな発想だな。

で、今は昼休み。僕は一人教室を出る。何故かつて？ そんなの決まってるじゃないか。

友達がいらないからだ。

おおっと、名誉のために言つとくが僕は別にいじめられてなんか

いない。そこまで惨めなやつじゃないさ。ただ単純に、そうだな。家柄が問題なのかもしれない。

「あいつが噂の？」

「らしいな。牧場貴族のだろ」

つまりそんなところかな。

興味対象であるが近寄りたくもない人物。それが牧場貴族、リクト・ユン・ダグラスだ。

ま、こういうものは時間の経過と一緒に薄れていって最後はそこそこ友達とか出来たりすると思っっている。無理に今友達を作ると返ってそいつが大変な思いをするだろう。

時間は大切だ。

ゆえに、お昼の時間帯は一人で教室を出て貴族御用達なる“パランザ”へ向かう。最初聞いたときは「何その雑魚キャラみたいな名前」と思ったがなんと食堂のことをそう呼ぶらしい。紛らわし過ぎ。素直に飯食い場って言えばいいのに。

「貴族たる方々がそんなことを言うはずがないでしょう」

後ろから、僕の斜め一步後方よりクールな言葉を投げかけられる。この学園内で、先生方を除けば唯一僕に話しかけてくる人物。肩ほどまである紅の髪。眼はオレンジ色で右耳には入学祝いにプレゼントしたハートのイヤリングを付けている。そこそこ高かったのは内緒。

僕よりやや低い身長だけど足は長く細い。胸はそこそこ。腰のくびれ含めスタイルは屋敷のメイドさんたちに「自分のを5グラムでいいから貰ってほしい」と羨まれるほど抜群だ。

護衛兼女騎士、リリィ・ダグラス。

「うん？ そっちのクラスも終わったの？」

「はい、私が終わるまで教室でお待ち下さいますよう、ここ二日毎日言っているはずですが」

「リリイと違って友達いないから、僕」

「性格悪いですから、ね」

「…… ホント、キミはひどいね」

「貴方にだけです」

リリイは僕の護衛であると同時に騎士でもある。見習いだけどね。アシュラン学園で新たに創設された『騎士部門』に一般試験で合格した猛者だ。普通、新たに創設されたと言ってもそこに入るのは名だたる武家名門の方々で、ダグラス家のような牧場貴族から合格するなど犬が空を飛ぶようなものだ、わん。

騎士クラスは確か2つしかなかったはずだ。対し僕の貴族クラスは12クラス。減らせよ。

カリキュラムも勉強というより稽古や作法を重点的にしているらしい。結構面白そうだけど僕には無理だなあ。出身が珍しいのと、外見も文句なしなため男女問わず人気があるらしい。主に女子からは凄い。僕とは大違いっすね。

「友達と一緒に食ってきていいよ。そういうのも大事だろ？」

「いえ、私は貴方の護衛ですので」

「同時にこの学園の生徒、でしょ？ 長い学園生活だ。自分のことも考えるべきだと思うがね」

「私が側にいるのは不満……ですか？」

……。言い方がまずかったかな。

どうにもこうにも僕は女の子が苦手だ。うちの屋敷にも五月蠅い

のがいるし。

リリイは変に頑固だからちょっと難しいんだよな、ある意味素直だけど。

「不満なんか今まで一度たりとも感じたことないよ。ただ学園内の友好関係を視野に入れるのも成長ポイントとして申し分ないと思っただけさ」

「私は貴方の護衛ですし、騎士です。一度決めた誓いは必ず果たします。それに」

「それに？」

「ここで貴方との関係性を切れば……。リクトと私はほとんど会う機会がなくなつて、しまう」

「……」

いや、最後の授業が終わつたらお前真つ先にここに来るじゃん。

音も立てずにいつのまにか廊下にいるじゃん。

それに、人前では主の名前を呼び捨てで呼ぶのは仕える者として完全な“タブー”であるのに昔の癖が出たのか、リクトになっている。敬語も崩れちゃってるし。全然気にしないけど。

しかし他の連中に聞かれたらあつという間にそれ系の噂が広がるつてのに、まだまだ甘い。

しかし、リリイの気持ちも無下にはできない。ホント、難しいな。僕としてはもつとリリイに学園生活の生徒らしい、上手く表現できないが『楽しさ』ってやつを味わって欲しかったのだが。

まだ時間がかかりそうだな。

「そう。ならこれ以上は言わないよ」

「っ！ ありがとうございます………！」

「その代わり、僕と食べる時は『一緒に』食うこと。昨日みたいに

後ろで馬鹿みたいに立ってたら二度と食わんからな」

「……はい。我慢します」
「するな」

これも彼女らしいとはいえbraしいか。

ゆつくりとリリイが変化していくのを見るのも『一興』だな。彼女にとっては『一驚』だけど。

うん。趣味悪いな、何て最低な主だ。

そう思って、僕はリリイと一緒に“パランザ”へ向かった。
もちろん、この時は当然思っていなかった。その帰り道――

運命の邂逅が訪れることを。

食事しながら

「リリイ」

「何でしょう」

「……お前、僕の千倍ぐらい貴族っぽいな」
「ですね」

現在、僕とリリイは“パランザ”で二人一緒に食事をしている。リリイは昨日僕が食事の際は後ろに立っていたが、さっきのこともあって今は目の前で静かに食事をしている。護衛としては当然いけないことなのだが、学園の生徒でもあるのだから全く問題ない。いや、それ以上か。

学園に来る前は屋敷で毎日見ていたものの、今日改めてリリイの食事の仕方・作法を観察すると、まさに『貴族』って感じた。凄すぎ。

「ねえねえ、あれってリリイ様じゃない？」

「ホントだ！ きゃあ、今日も凛々しく綺麗な佇まい！」

「え、でもあの前にいる男は誰？」

「さあ？ パツとしない男っぽいけど」

誰がパツとしないだ。失礼極まりないな。

こう見えてもアシュランに来る前までは地方で『乳揉みリクト』の異名を持っていた男だぜ。舐めてもらっては困る。むしろ舐める方が僕だ。その手つき、技法、速さ、身のこなし。全てにおいて僕の右に出る者はいない。

まさに天才といえよう……！

「牧場の乳搾り如きでそんな偉そうにしないで下さい」

「勝手に人の心を覗かないで下さい」

「顔に出てるんですよ、その乳顔が」

「……ホント、キミはひどいね」

「貴方にだけです」

ま、そんなことは置いていて。

実際、どうしたもんかね。リリイはこの学園の生徒だから僕と一緒にに食事をとっても問題ない。けどなあ、どうにかしてもっと友達との交流をもってもらいたいんだよね。

で、だ。一番友達との友好関係が上がる日といったらやはり『休日』だよな。

リリイのことだ。おそらく相当モテるだろうから休日となればクラスや学生寮で声がかかるだろう。その時僕の護衛という任務があるとそれを邪魔する可能性大だ。

明日と明後日は休日。

さっきの女子たちの様子をみるに、リリイと話したい子も多いはず。なら明日と明後日のイベントを逃すはずもない。

それと同時に、明日、僕はこの学園内を探索したいのだ。

いや、別段理由はないけれど、ちょっと興味あるんだよね。王都が運営する学園。もちろん内部の広さも尋常じゃない。一日で探索できるなんて思っていない。また、“パランザ”は人が多すぎる。

僕は静かで落ち着いている場所が好きなのだ。絵画も集中して描けるしね。

と、なると。その僕の予定を聞いたリリイが反応する態度は……。

「私もお付き合います。当然です」

だな。それは回避しなければ。かといって、もしリリイにこのことを話さなかったから……。

「私に知らせもなしに学園内を探索とは、随分な身分ですね」
「だな。あれ？ 別に怒られる理由なくね？ 僕一応リリーの主だよね？」

選択肢は二つ。

リリーを連れて明日探索する場合↓リリーが他生徒との交流する機会がなくなる。

リリーを連れずに明日探索する場合↓リリーに怒られる。

……考える必要もないことだったな。

「リリー」

「何でしょう、リクト様」

「明日、僕は一日使って絵画をするつもりだ。だから」

「ならば学園内を探索するのはどうでしょう？ 良いポジションが見つかると思いますよ」

「……」

この女、マジで読心術使えるじゃないだろうか。

何で一生懸命考えた僕の結論をたった一言で崩壊させられるんだ。騎士じゃなくて尋問官の方が向いてると思う。美貌もあって数分で堕ちるだろ。

って負けるな僕。リリーの学園生活がかかってるんだぞ！

「いや、明日は寮内で描きたいんだ。寮の屋上がなかなかの風景だね」

「そうですか、でしたら私は明日、剣の稽古を」

「いや、それもダメだ」

「？ 何故ですか？」

「たまには外出して王都を見て回るのも騎士として当然のことだ。いきなり、王都が攻め込まれたら都を熟知していないと上手く動け

ないことになるだろう？」

「確かに」

なわけないだろ。王都が攻め込まれるとか、数百年前ならともかく今は平和な時代だぞ。

リリーの素直さが見事に花開いたな。これはいける。

「しかし、私一人では」

「そこで、だ。今日の夜に寮内の休憩場で都の地図を眺めるんだ」

「……それに何の意味があるのですか？」

「いいからいいから。それで万事解決だ。視野を広げる良い機会だよ」

納得できない顔をしているリリーであつたが、最終的には「わかりました」と頷いてくれた。

うん、これであとは僕が学園内で探索したとバレないようにすればいいだけ。バレたら即極刑だが、そこは抜かりない。

僕は友達がいらない。

ゆえに、僕を見かけても誰も僕の話なんてしないだろう。興味もないだろうし。

一人で学園内を探索していても、「ああ、友達いなくて一人で歩いているのね」と思われて終いだ。彼女に僕がどうこうしていたという情報がいくことはないだろう。完璧な作戦。計算し尽くされた見事な計略に他ならない！

「やや、お顔が優れないようですが大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫。ちよつと自分のアホさに打ちひしがれていただけ」

「いつものことですね」

ホント、キミはひどいね。貴方にだけです。

というのはもう言葉にせずとも充分なやりとりだった。眼と眼で伝わる関係だから。

そのまま、僕とリリイは“パランザ”を出る。午後の授業は確か歴史だったな。歴史よりも身体を動かす方がいいんだけど。大切な貴族の方々に怪我を負わせたら大変とか思ってるんだろっな。貧弱貴族だからこそ鞭打つのが道理だと思うが。

無駄に広い廊下も慣れればいいものだ。

次の曲がり角で僕は右に、リリイは左に別れる。そして授業って流れ。そして今日は終わりだ。

僕は曲がるために歩きながら少しだけ右へ……

「——！」

いざ、運命の時。

死神王女

金、白、絢爛。

見た衝撃を即座に言うなら今の三つが浮かぶ。しかしそれ以外の言葉もない。

教室へ向かうため曲がろうと思っていた角からスツ……と女の子が出てきた。

最初に見えたのは金。純な、光り輝く金色の髪。髪であるのにそれは宝石のようで、髪と呼べるかどうかも定かではなかった。

次に視認するのは肌。アシユランで雪が降ることは十年に一度程度であるが、その雪を連想してしまっただけ透き通るような肌だった。

そして、絢爛。言うまでもなく、彼女の服装だ。これは表現する必要もないし、残念ながら僕の語彙力ではすることもできない。頑張っというと、赤と白を織り交ぜ腰から下はストレートな布地を使用していた。

ザッ――

何かの音がした。

振り向くと、後ろにいた生徒が……無駄に長い廊下のずっと奥まで目で確認できる生徒が。

僕の目でわかる生徒全員が、『礼』をしていた。上半身を前へ傾け、右手を左胸に当ててじっとする。すぐ隣で、物音がする。見ればリリィが他の生徒とは違い左足をやや後ろに下げて座り、下げたところへ左こぶしを置き頭を下げる。貴族より身分が低い者にとっ

ての『礼』だった。

ただ、彼女がこちらに来ただけで。

ただ、彼女がこちらに歩いて来ただけで。皆がそうした。僕もそれは同じ……はずだったのだが。

「リクト様！」

すぐ隣で、リリイが小声ながらも最大限のボリュームで僕の名前を呼ぶ。いや、叫んでいた。

僕は、礼をしていなかった。厳密に言えば出来なかった。理由？　なんか王族が嫌いだったから……なんてガキ臭いことは言わないさ。そういうところはさすがに僕でもわかっている。この国をまとめてくれている方。彼らがいないとまた戦争の時代に逆戻りするとは明白。

だから、礼をすることは当然のこと。それに関して異論はないし、マイナスな思いを心に秘めているわけでもない。むしろ感謝している。

けど、できなかった。

ホント、何故だろうね。あの時、僕は何故礼ができなかったのだろうか。

目の前の彼女を。眼前に映る彼女を僕は視界から離すことができなかった。ずっと見ている他なかった。けど、それは同時に直感でわかった。

彼女に礼をしないのは、国に礼をしないのと同義。

つまりは、反逆。ゆえに、謀反。家族が、危ない。

僕が彼女に礼をしなかったのは、ほんの数秒程度に過ぎない。それでもその間はまるで次元の狭間に身体を突っ込んだような感覚で、

長く長く永遠のようであつた。

「し、失礼しました……」

他の者は上半身を傾けているためそれを見ることはない。

僕が礼をしなかつたのを見ることができたのは二人だけだ。護衛であり、騎士でもある。ダグラス家の（一応）次期当主、リクト・ユン・ダグラスを永遠の主と誓つた女、リリィ・ダグラス。

そして、美貌たるは国随一。金なる髪。白なる肌。眼の色は海を連想させる蒼海な青。凜とした鋭さを放つリリィの目つきとは対極的に、シャープな顔立ちでありながらも優しい眼差しは、聖母と評すに遜色ない。両耳と頭には、王のみが許されるという獅子をデザインとしたイヤリングと王冠があつた。アシュラン王とは違い、彼女の王冠は小さくカチューシャと同じだつた。

絶世の美女だつた――

見た目は、外見は、完璧だつた――

数秒の時間が流れ、僕が自分のやっている重大なことを認識し、遅れながらも礼をする。

その流れを、黙って彼女は見ていた。何も言うことはなく、ただ黙してそれを眺めていた。

「あら、貴方……」

ゾクリと、悪寒が身体を走りゆく。瞬時に悲惨な末路が頭を展開した。

地位を剥奪され、名誉を汚名に、馬鹿な者へ哀れな最後を。一族全員公開処刑。

覚悟する。それは今自分がやったことを考えれば何らおかしなこ

とではない。そこらの貴族ならまだしも、相手は王族。しかも次期王だ。横に座っていたリリーの身体が僅かながら震える。彼女も僕と同じことを考えているのだろう。

ごめんな、もしそれが現実になったらお前だけでも何とか逃げられるよう尽力するよ。多分、冗談じゃないと立ち向かおうとするだろうけど。

「ああ、そんなに固くならないで。別に怒ってなんかないわ。っていうか怒るわけないでしょ」

……ん？ ちょっとまって。今、姫にあるまじき発言しなかったか？

『っていうか』と言わなかったか。いやいや、まさか。仮にも王ともあるう方がまさかそんな。そこらのギャルじゃあるまいし、ねえ？

きつと空耳でしょ。この歳で難聴とか、僕もそろそろ棺桶買おうかな。爺ちゃん笑いながら作ってくれそうだ。元気にしてるかな。

「そうじゃなくて、私、貴方に言いたいことがあるのよ」

そんな僕が懐かしの祖父のことを思っていると。

グイツと姫が僕の顔を覗いてきた。思わず仰け反る自分。幸い、他の生徒は未だ礼をしている。ちょっと遠いところにいるし、姫様の声は届いていないようだ。

が、そんなことを考えている余裕はない。

近い近い！ 超近い！

「……ん、そうね。間違いないわね」

当たり前だが、僕は一応この学園の生徒だ。

嫌々ながらも、入学してしまつた以上今更逃げるなんてことはない。こうなつたら精一杯楽しんでやろうじゃないか。リリイもいるし、新たな楽しみだつて見つかるかもしれない。

そうだ、何事も経験だ。

マイナスばかり考えているから、転がっているプラスなことに目がないんだ。そんなんじゃ人生面白くないだらつて爺ちゃんと言つてた。僕もそう思う。

辛い時があつたら誤魔化さず泣けばいい。楽しい時があつたら見栄を張らず笑えばいい。

そんなもんだろ、人の生き方なんて。そんな爺ちゃんの生き様、すげえかつこいと思う。大事にしたい。けれどね爺ちゃん。それよりも大事なこと、あると思うんだ。皆忘れてる、当たり前のこと。僕はそれを一番大事にしたいな。だから、だから――

「貴方、今日死ぬわ」

平和が一番と、誰もが言つたよ。
何この死神王女。

カフェ

「いやあ、今日も普通の授業だったな」

「そうですね」

「僕のクラスは勉強ばかりでさ。正直退屈なんだよね」

「そうですね」

「リリーのクラス、午後は何の授業だったんだ？ 教えてよ」

「そうですね」

「……。はあ」

現在、僕とリリーは学園内の廊下を歩いている。

特に向かうところもなく、適当にという感じだ。明日と明後日は学園が始まって以来最初の休日もあってか一年生は皆浮かれている印象を受ける。

王都・アシュランに初めて来た生徒も多いらしく、友達とどこか遊びに行こうと楽しそうな会話が四方八方より聞こえてくる。いいなあ、僕も混ぜてもらいたいものだ。友達いないのにね。……いいのにね！

そういえば、この学園にも部活動っぽいものがあるらしい。

何て名前だったっけか。確か“アクティ”だったけ？ いい加減、何でもかんでも貴族という理由だけでふざけた単語に変えるのは止めてほしい。覚えるのも大変なんだぞ。……これに関しては部活でいいや。人に話す時だけは“アクティ”と答えよう。

部活動の勧誘は来週から、つまり二日間の休日を挟んでからだ。美術部があると聞くと、結構楽しみなんだよね。それに関しては……

「どう思う？ やっぱリリイはフェンシング部に入部するの？」

「そうですね」

「……。まだ気にしてるのか？ 死神王女のこと」

「当たり前です！」

キツと睨み、静かでありながら強い口調で発すリリイ。超怖い。

死神王女が僕に素敵な宣告をしてから数時間。死神さんはあの一言を言うとは事もなかったのようにスタスタと歩いていった。よく見ると、彼女の金色の髪は足元まである。充分長いのだが、この前の入学セレモニーの際は従者が四人で持っていたよな……。どうやら、あれはカツラだったようだ。ん？ こういう時は付け髪といふのかな。

ま、それは置いて。

あれ以来、リリイの表情がひどい。もっと言うと怖い。

明らかに不機嫌だし、どう見ても怒っている。誰が見ても近寄りがたいオーラを放っていた。まあ、自分の主が「死ぬ」と言われたらそりゃあ怒るよな。しかも今日だ。

「リクト様は何とも思わないのですか」

「思わないよ。まだ僕若いし」

「理由になっていません！」

「そ、そんな大声出さないでよ。ちょっと落ち着こうぜ」

未だ荒ぶってらっしゃるリリイさんの炎を静めるために僕らはカフェに向かう。

凄いもので、なんと学園内には八十以上の飲食店があるのだ。馬鹿じゃないのか。何考えてんだ。

けれど、それが今回はラッキーだった。こういう時、人ごみが多いところへリリイを連れて行くわけにはいかない。怒りの矛先が他

の生徒へ向かつてはもう取り返しがつかなくなるからだ。

三十分ほど廊下を辿って学園中を歩いた。基本、人目が少ないところを目指してだが、延々と校舎と校舎が続いているこの学園の広さたるや驚き以外の何ものでもない。

ふと、廊下から外を眺めると噴水の庭があつて、その先に林道が続いていた。

ひよつとしたら誰もいない静かな場所があるかもしれないと、僕が半ば無理してリリイを連れて進む。すると……

「おお！」

「カフェ……ですね。それも小さい。個人の別荘を改装したのでし
ようか」

「何で学園の中に別荘を建てるんだよ……」

「名のある貴族の方々は学生寮ではなく独自の屋敷を建造して住ま
われてますよ」

ああそうだった。すっかり忘れてた。

特に公爵家や伯爵家は学生寮から遠いところへ『わざわざ』自分
たちの家を建てている。

財力を形にすることが彼らにとって一番大切なことらしい。

「そんじゃ、行ってみよう」

「帰ります」

「却下だ」

「何故ですか！」

「僕は今とても紅茶が飲みたい。そして目の前にはカフェ。行くし
かないだろ」

「ですが！ 今日とは可能な限りご帰宅されて」

「行・く・の」

そう言って僕はリリイの手を握りズンズン進んでいく。

突然のアプローチに戸惑ったのか、「あ」と、か細い声をあげるリリイ。なんか可愛かった。そのままの勢いで僕は進む。半ば諦めたりリイもその後が続く。

こういう時、僕が他人の声を一切聞かなくなることと彼女を知っているからだ。

カランカラン……

ドアを開くと心地いいミニ鐘が鳴る。

そして中を見渡せば……オシャレな店内が飛び込んてくる。小さいけど、素敵な喫茶店。

机は二つしかない。外にもう一つあったから全部で三つか。カウンター席も五つしかないから本当に小規模なカフェという印象を受けた。後ろを振り返れば見渡す限り林の風景。

自然の中にぽつんとある、けれど癒される喫茶店だ。

「いらつしゃいませ。ようこそ“クローバー”へ」

僕とリリイが辺りを見渡していると、奥から一人の男性が姿を現した。

見た目は四十代後半。タキシードを着ているが、蝶ネクタイを外して襟を解き大人の魅力を漂わす。ちょび髭がいい感じにきまつていて身長も180センチぐらい。本当、かつこ良すぎだ。まさにオーナーの中のオーナー。

リリイが礼をして僕もそれに続く。すると、ちよつと驚いたオーナーさん。

「おや、貴方様は貴族ではないのですか？」

「いえ、僕は一応貴族ですけど……何故ですか？」

首を傾げながらそう言うと、「ほお」と関心したように笑顔になるオーナーさん。

リリイを見ると彼女もよくわからないといった顔をしていた。そのまま二人でオーナーさんを見ると苦笑しながらも優しい声で返してくれた。

「いえね、普通、貴族階級の方は私めのような者に礼などしないので。ちよつと驚いてしまつてしまつたんですよ」

「ああ、なるほど。……あつはつは、ついオーナーさんの雰囲気にもれちゃつてお辞儀してしちゃつたな。迷惑でしたか？」

「いえいえ、そんな。とても礼儀正しい、素晴らしいお客様と思いました」

……うわあ、そんな恥ずかしいセリフよく本人の前で言えるなあ。リリイ含め、自分の顔が赤くなるのを感じた。同時に、この人がとても信頼できるというか、親しみやすい人だとも感じた。ちよつと遠かつたけど、わざわざ歩いてきた甲斐があつたつもんだ。こんな素晴らしいカフェに巡り合えるなんて。しかも学校始まつて二日目に。

最高だ。近くにあつた椅子に腰掛け、もつとオーナーさんと話そうと口を開きかけた……その時だつた。

カランカラン……

「あら、先客がいたのね」

「いらつしゃいませ、セラ様。今日はいつもよりお早いのですね」

「ええ、ちよつと嬉しいことがあつて……そこにいる殿方のおかげで、ね」

後ろを振り返るまでもない。

その声、二度と忘れるわけもない。

忘れるという事象そのものが、もはや無意味なのかもしれない。
そう思えるほど、今の僕は冴えていた。

「また会えたわね、リクト・ユン・ダグラス」

どうやら最近の死神は、二度会えるらしい。

心理と紅茶

セラース・フォン・アシュラン。

通称セラ姫。セラースだと「ース」の部分はいちいち伸ばす必要があるため、本人が嫌がりセラという名前が定着した。六百年続く歴史あるアシュラン王国の次期女王になれる方だ。

ただまあ、僕が知っている彼女についてはこれぐらい。

一般貴族の僕みたいな人間は、彼女と話すこと事態がまずありえないことだ。ましてや、呼び止められたり、顔をズイツと近づけられたり、死刑宣告を受けたり、カフェで再会するなんてこたあ……

「ほばないよね」

「何がかしら？」

「いや、こつちの話さ。セラース王女、様」

「あらあら、随分な他人行儀ね。セラで構わないわよ」

「あ、そう？」

ギン！ と後ろから恐怖の殺気が放たれる。

凄いなあ。多分、後ろ振り返ったら僕死んじやうね。見ただけで人を殺せるなんて世間で初めてのことなんじゃないだろうか。

リリイ・ダグラス。視線だけで人を殺せる騎士……『視殺騎士』。なんちゃって。

視察と刺殺をかけてみました。自信作です。

“斬りますよ？”

冗談です、冗談ですって。

後ろを見ていないのに、しゃべってもいないのに何故彼女の想いが僕に伝わるんだ!?

内心ガタガタしていると、苦笑まじりにセラ姫が問いかけてきた。

「さつきから表情がコロコロ変わっているけれど……何か考え事かしら?」

「ん!?! え、え」と。何でセラ姫様がここにいるのかなあって」

「セラで構わないと言っているのだけれど」

「んなこと言ったら僕殺されちゃうから……」
「つっても、今日死ぬみたいだけれどね」

「そうね。私が言ったのよね」

スツ……と後ろからの殺気が消えた。

同時、何とも表現し辛いリリーの気持ち小さい波となって伝わってくる。第六感って、こういう眼に見えない波を感じるんだろうな
なっている。

まったく、強いのか弱いのかはつきりしない騎士様だなあ。不安になる必要はないよ、リリー。

僕は大丈夫だから。

「ま、どうせ今日死ぬのだから僕がどういう態度をとろうが問題ないですよね?」

「そうね、まったく問題ないわ。ついでにその舌足らずな敬語と、後ろの従者を気遣う余裕もなくしてもらって構わないけれど」

「はっはっは。意味がよくわからないなあ、セラ王女殿下」

「セラ。と再三言っているのだけれど?」

「……はあん?」

バチリツと火花が散る。

お互い笑顔を浮かべながらも相手の心理を探ろうと、また相手か

らこちらの心理を探らせないようにと言葉に所々トゲがある。けれど、こちらの心境とは違い、どこか眼前の姫様は『楽しんでる』印象を受ける。

っていうか、今思ったけど……。これ、僕は今日死ぬからどんな態度とろうが問題ないと言ったけれど僕の周りの方々はどうなるんだろ。リリイとか、家族とか。おお、結構やばいんじゃないのか。

「ま、いいか」

「あら。何か面白いことでもわかったのかしら？ 気になるわ」

「うん？ いやいや別に、大した事じゃないさ。『そんな心配』そもそも意味がないと理解しているからね」

「趣旨が見えないのだけれど」

「僕が死ぬわけねえつつってんだよ、お嬢さん」

カタン。

僕と彼女の前に、二つのコップ。中に入っているのは紅茶だ。とても落ち着く、ほんのり甘い香りがする安らぎの一杯。完璧なタイミングで出してきたな、と関心した。

ま、事実そうだろうけど。

お互いに、置かれた紅茶をすする。それはとても美味しくて、甘くて……。飲んだ後吸った空気は、また格別なものだと思った。この状況、傍から見れば僕が一方的にキレているだけのように見えるが、実際はそうじゃない。僕は毛ほども怒っていないし、相手を挑発してもいない。

ごく、一般的な見解を述べているに過ぎない。相手に死刑宣告を告げた彼女に対し、告げられた者としての当たり前前の対応をしたに過ぎない。

それを含めて、相手の王女はわかっている。にっこりと嬉しそうな表情がその証拠である。

後ろで、リリイが震えているのがわかる。

俺の一言に、戦々恐々といったところか。まあ、普段の僕ならまず言わない言葉だろう。しかも相手はこの国の次期最高権力者だ。恐れ多い、何て生易しいものじゃない。死と真正面から対するようなもの。それは同時に、自分の全てを殴り捨てたようなもの。

でも、それでいい。

それだからこそ、面白い。

面白いのだから、僕は言う。相手の目を見て、しっかりと。

「僕は死なない」

「ふふ、そう」

コトン、と両者共に紅茶を置く。

僕は微笑を浮かべながら。セラ姫は優雅に微笑みながら。

同じ『微笑』という表現を使っているのに、こつも笑みの色合いが違うとは。言葉遊びともいえるがなかなかどうして、興味深い。

それでは、そろそろ本題に入ろう。

最初からこうしていれば、と後でリリイからお叱りを受けるかもしれないが、まあ相手の出方を見る上でも、今までののはちよつとしたお遊びと思っただければ幸いさ。

道中楽しめれば、人間冥利に尽きるってものだろ？

「何故、僕が死ぬと言ったのかな？」

「あら、それは言うてはならないことよ、リクト・ユン・ダグラス。だって、その質問は今の問答においてタブーに他ならないじゃない」
「勘違いするな、ミス・セラ王女。僕は貴方の言った死刑宣告の原因を聞いたんじゃない」

「……。では、何を聞いたのかしら？」

……ふう。まったく、ここまできても白を切るとは。

一風変わった心理攻防戦もそろそろ終わりにしたかったんだが、どこまでその笑顔を続けるつもりなのか。まさか、僕が気づいていないとでも思っているのだろうか。

いや、彼女ならそうは思っていないな。

今の発言を含めて、セラース・ヴァン・アシュランの予想範囲内なのだろう。

どこまでが本気で、どこまでが演技なのか知らないが……。
まあいいさ。そっちがその気なら――

「僕が死ぬという、『嘘を言っただけ』僕と接触してきたその真意を聞いているんだよ。セラ」

こちらにも本気と演技、両方でいかせてもらおう。

死神王女との攻防戦は、紅茶が冷める前に決着しそうだ。

未来への邂逅（前書き）

本文を読まれました後に、あながきを必ずお読みくださいますようお願い致します

未来への邂逅

テーブルに置かれた紅茶。数は二つ。

そのうちの一つを僕がゆつくりと取って静かに飲み干す。僅かな時間を残して、決め手の一言を告げて。それは僕にとって王手に近いものであり、彼女にとって一突きを貫かれたことと同義。

飲んだ紅茶を置いたと同時に、王女は言う。

「どこから、気づいていたのかしら」

「うん？ まあ、色々あるけど……。正直言うと、最初からだね」

「単に変人な王女と思うのが普通だと思うのだけれど」

「ああもちろん。それが変人なら、ね。でも貴方は王女だ。それで充分さ」

静かに一息吐きながら、セラ姫は椅子にもたれかかる。

視線を右下に落としながら、彼女なりの錯綜の末、さらに僕への質問が続く。

「私が『魔法を用いた』と解する余地もあつたはずでは？」

魔法。

この世界にある「魔」詞不思議な「法」。

その力は戦争が終結した百年前まで絶大な権力を誇っており、魔法が使える魔法師は国にとってなくてはならない存在であった。

まあ、終結した今であっても魔法の研究、進化は続いており、試験の一つにも数えられる。けれど、昔と違ってそれは『必修』ではなくなった。つまり、興味のある者ない者で選べるようになったのだ。それは即ち、魔法より何か別のものを世界が求めているようにも思える。

その別のものがわかれれば苦勞はしないけど、ね。

とにかく、この世界において魔法はごく当たり前のよう存在する。事実、僕の家にも代々伝承されている魔法があるし、しかも面倒なことにダグラス家の血筋を持つ者でないと扱えない魔法まである。

牧場農家に伝わる魔法なんて、たかが知れてるけどね。

「アシュラン王家に伝わりし魔法で、貴方の未来を予知したとは考えなかったのかしら？」

「ん、確かに可能性としてはありそうだけど、ありえない話だ」「何故」

「もしその話が現実のものとしたら、それは未来を見る……つまり数多ある魔法の中でも最上ランクに位置するとされる『予言魔法』だ。通称、予言師とされる魔法界最高峰の地位を貴方のような十代な娘が手に入れたとしたら、それは確実に世界的ニュースになる。さすがの田舎貴族の僕でもそれぐらいのビッグニュースなら知っているはずさ」

「……ふふ、そこまで知っている時点で、大したものよ」「世辞は嫌いだ」

フン、と首を右に振る僕を見ながら、彼女は自分の紅茶をすする。先ほど僕がしたと同じように、ゆっくりと、たつぷりと味わうように。まるで数ヶ月砂漠を歩いてようやく見つけた水を存分に味わうように。

大切に、愛しそうに……。

そして、優しい微笑と共に静かに下ろす。

「完敗だわ。リクト・ユン・ダグラス。私の負けよ」

何の勝負をしてたんだよ、と突っ込みたかったが、何とか相手の地位を思いとどまりそれを止めたのは内緒だったりする。ま、本当……面倒な姫様だったよ。

夕日が二人の背中を照らす。

僕とリリイは、今寮へ向かって帰宅している。

本来なら来た時と同じように校舎の中を通っていくはずだったのだが。その道すがら、廊下ではなく外を歩きながら帰りましようと言ってきたのは僕の護衛兼、騎士の女の子だった。

彼女は僕と死神王女が問答する様を、じっと黙って見ていた。

彼女曰く、見ているしかなかったそうだ。

見ているしか、自分に来ることはなかったそうだ。

「リクト様は、凄いですね」

「ん？ どったの急に」

「いえ、私は姫様が言ったあの言葉をその通り受け止めていました。ゆえに何て失礼な姫様なのだろうと。けれど、あれは全て嘘だったのですね」

「……まあ、最終的にはそうなるかな」

「最後のあの言葉も、真実なのでしょうか……」

最後のあの言葉。

リリイが言っているそれは、きっと紅茶を全て飲んだ後に言ったセラ姫のセリフだろう。

「私が接触してきた理由は、他でもない、貴方が『ダグラス家』の者だからよ」

ダグラス家。約百年前、貴族になった牧場農家。

僕の祖父である、クロード・ユン・ダグラスは百年前にある大手柄な実績を立てた。いや、大手柄どころではないな。

ぶっちゃけ、世界の崩壊を止めたといっただけ。

何故なら、もし祖父が動かなければ、この世界を二分している国同士が本気の戦争をするはずだったからだ。百年前まで、この世界はアシュランとザヴェードという国が治めていた。双方、あまりにも戦力が拡大し尽してしまつて、しかし強大ゆえ爆発させることも出来ず、冷戦状態となっていた。いつ切れるかわからない大戦争。各所では、頻繁に小さな戦争がそれを背景として勃発していた。

そして、ある日。

ザヴェードの大軍が祖父がいた地方に侵略してきた。

もしあの時、祖父がいなければ、ザヴェードはその地方を侵略。

そしてそこを拠点に一気にアシュランへ侵攻。派生して世界全土を巻き込んだ大戦争へと進んでいただろう。

が。

その未来は一人の男によつて打ち碎かれる。

とても牧場農家とは思えないほどの豪腕と強大な魔力を持っていた祖父は、たった一人でザヴェード二万の群集と対戦。……勝つてしまふ。さらにこのままではまた自分がいる地方に侵攻されるとそのまま敵地ザヴェードへ単騎で侵入。

んで、何年かした後に、アシュランとザヴェードは『協定』を結ぶことになった。

……いやいやいや。普通はありえないと思うだろうなあ。まあ、それが普通だ。けど事実なのだから仕方ない。爺ちゃんがあの時何をしたのかは、結局爺ちゃんは話してくれない。男同士の秘密だの

何だので真実は闇の中といったところだ。

それでも、爺ちゃんはこの世界の戦争を無くした。

それが何を意味するのか、わからない僕でもない。

いつか必ず爺ちゃんから事の真実を聞き出してやるつもりだが、気長にやろうと思う。

誇りを貫く僕の祖父は、何者よりも、かつこいいから――

「あのダグラス家の血縁者である貴方に、一度お会いしてみたかったのよ。そして出来れば、その血筋たる器を、拝見したかったの」

それが、彼女。

セラース・フォン・アシュランが僕に接触してきた理由だった。

「ま、僕に接触してくる理由なんて、それ以外ないからね。あれが本音じゃないのかな」

「そうでしょうか。私には、まだ何か裏がありそうな気が……」

「考えすぎだよ、リリイ。それに、仮に他の思惑があったとしても、僕たちが危険な目に会うなんてことはないさ。だって僕、牧場貴族だぜ？」

どやあ、とばかりに得意げな顔をする僕。

その表情を見るや、面食らったリリイであるが、クスリと笑ってこちらに顔を向ける。今までの不安をばいっとそこらに捨てたようだ。それでいいのさ。

「……クスッ。そうでしたね。何の取り得もない、普通の貴族でしたね」

「そうそう！　って本当、キミはひどいなあ」

「ふふふ、ええそうですよ。貴方にだけ、ね」

そして僕は寮へ帰って行く。

あゝあ、まったく。入学してまだ二日しか経っていないのに。どうしてもこつも面倒なことに巻き込まれたのかね。……でもまあ、結構楽しかったから。

良ししようかな。

ここはカフェ“クローバー”。

先ほどまでリクトとリリイ、そしてセラがいた場所。経営するのは店のオーナー、ゼス。

夕日が林道を照らす様を、王女は静かに見ていた。その背中を、ゼスが温かな眼差しで見守る。彼女から感じる、幸せの余韻を邪魔したくなかったからだ。

今、セラース・フォン・アシュランは人生最大の幸せを感じ入っていた。

「予想以上……いえ。想定外の人物だったわね」

「左様でございますか、セラお嬢様」

「あら、セラ姫じゃないの、ゼス？　貴方が私の従者だってこと、バレてしまうわよ？」

「ご冗談を。私に偽りの隙間など、元より影すらありませんよ」

その言葉を満足そうに聞くセラ。

彼が自分の従者であることを隠しながらも、リクトに近づいてきたのには理由がある。まさか、死刑宣告を告げたその日のうちにゼス所有のカフェに来るとは思いもしなかったが……。

まさに、これは運命と感じざるを得ない。

彼らに言った『ダグラス家だから接触した』という理由。

実際はそうである。百年前、一人でアシユランとザヴェードを協定させた張本人。それは確実に一人では為せなかった大業。おおよそ、十数人、彼の力になった者たちがいるはずである。けれどその者らは、今となっても公に姿を現さない。

一度出れば、世界中から賞賛の嵐だというのに。

同じように、リクトの祖父であるクロード・ユン・ダグラスも国から出る恩賞を一つも受けなかった。唯一受けたのは（それも、ものすごく嫌がってだが）農家から貴族という名誉だけ。

彼の血を受け継いでいる彼は、いかほどの者か。試したい。

ただそれだけ。けれど確信していた。まず間違いなく普通の者でないことを。そして、試行錯誤して考えた結果が、あの宣告だった。

“貴方、今日死ぬわ”

正直、どちらでもよかった。

告げられた直後、狼狽してもよかった。

何事かと憤慨してきてもよかった。

笑止とばかりに笑い飛ばしてくれてもよかった。

けど、違った。彼はそのどれも該当しなかった。全てを見据え、真意を射止めてきた。

まさに、脅威という名の驚異。斜め上をいく男。

「嬉しかった。私にあんな、様々な言葉を流れるように繋げてくれることが」

「……そうですね。おそらく、彼ぐらいなものでしょう。姫様に一

片の敬意もなしに、思うがままの言を放てる若者は」

「ええ。そしてその真髄は見事、私の真意を撃ち抜いた」

「鮮やかに」

「軽やかに」

窓を開けるぜす。吹き抜けるは一陣の風。夕日と交じり合つ、享楽の温もり。

一滴の。雫が。彼女の頬を伝う。

それは紛れもない、心の底からの喜び。嬉しさ。感動。

「やっと、巡り会えた。私が求めていた人。彼ならきっと、私の想い描く未来の、力となってくれる」

「お嬢様……」

立ち上がるは、一人の女性。

其が女、アシュラン王国の次期王女なり。

眼前に映るは、林道の景色だけにあらず。行く末、未来、延長なる世界の果て。

戦争がない今、王として彼女は今、誓いを空へ。

“この国の、世界の、未来の。

新しい一步を私は指し示してみせる。

セラーズ・フォン・アシュランの名にかけて。そしてそれには、

あの人が必要……！”

彼女が想い描くは、『経済』。戦争なき今、人々の新境地たる舞台。

その足がかりを、王として照らしてみせる。

ありとあらゆる方法で、幾千幾万たる方向より。国から大地へ。
大地から世界へ。
世界から未来へ！

「リクト。貴方と一緒になら、きっと出来る」

二人の物語が、今、始まる――

未来への邂逅（後書き）

ありがとうございました。

次話（？）もありますので、この後書きは飛ばしていただいても構いませんが、一応の『締め』はやっておこうかな、と。

いかがだったでしょうか。

この物語は、これからセラとリクトが織り成す恋愛と学園と経済な小説へと変わっていきます。

彼女は、戦争がなくなったこの世界で人々が目指す、又は目標にできる舞台を作り出す必要があると思っていました。

何故なら、それが無い世界だと、いつか必ずまた戦争が起けると確信していたからです。その証拠は歴史が語ってくれます。

ゆえに、彼女にとって心より安心でき、また頼りになるパートナーが必要でした。

勉強だけでも見えない部分が多分にあり、自分にはそれが確実に欠如していると自覚していたからです。

だからこそ、物事の真意と見定めに適した人物が必要でした。それがリクト。牧場貴族の平凡男子です。

学園行事から手始めに、彼女は様々な催しを企画していきます。それは戦争しかやることがなかったこの世界にとって、少しずつ未来の光へと繋がっていきます。同時に問題も当然起りますが、それを乳搾りことリクトさんが頑張って（何だかんだで）フォローします。

基本は学園行事を通してドタバタ、ラブコメな展開と、それに派生する経済効果や市場の活発化を重点に。

っていうか、ほとんどラブコメなんですが。

そんなお話でした。

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

よろしければ、感想を書いていただけると幸いなのと、

次話……のようなものもありますので、読んでいただければ歓喜！
それであ。

ザヴェード

この小説では、物語の舞台がアシュランでした。

では、もう一つの大国では、どんな物語があつたのでしょうか……

アシュランと並ぶ、大国『ザヴェード』を舞台とする小説を開始しました。

こちらのようなプチ経済とか小難しい話ではなく、ほんわかドタバタとした小説です。

物語の主人公も、貴族ではなく、前世の記憶がある異世界トリックな人物。

といっても、別段大冒険ではなくてある職業を目指しながら身内の騒動に巻き込まれがちな物語です。ゆったりとほのぼの風味だけれど、やっぱり慌しくもあって……。

【異世界でお医者さん目指します。】

もしお暇でお時間がある方、よろしければ一度

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7248x/>

牧場貴族と死神王女

2011年11月26日19時23分発行